

妊娠初期の流産後に発生したRPOC (Retained products of conception) に対する駆瘀血剤の投与症例について

大津赤十字病院 産婦人科(滋賀県) 藤田 浩平

Retained products of conception (RPOC) とは流産や分娩後に子宮内に胎盤や卵膜が遺残している状態とされる。RPOCは血流異常を伴った局所の瘀血状態であり、駆瘀血剤の処方報告もされている。当院において妊娠初期の流産後のRPOCに対して駆瘀血剤(桂枝茯苓丸)を投与しつつ待機療法を行った6例は、副作用もなくRPOCが消失したため、その治療経験を報告する。

Keywords RPOC、桂枝茯苓丸、待機療法、クラシエ桂枝茯苓丸料エキス細粒(2g/包)

緒言

Retained products of conception (RPOC) とは流産や分娩後に子宮内に胎盤や卵膜が遺残している状態とされ、妊娠の1~6%に発生するとされている¹⁾。多量出血の原因となることがあり、出血に対応できる施設で管理することが望ましい。その治療には侵襲的な子宮動脈塞栓、子宮鏡下手術、子宮全摘術といった処置があるが、待機的に経過をみることも行われている^{2,4)}。

RPOCは血流異常を伴った局所の瘀血状態であり、漢方薬として胎盤遺残の治療には古くから駆瘀血剤も応用されており、1822年には和田東郭が桂枝茯苓丸の投与について、1836年には吉益東洞が桃核承気湯の有用性を示唆している⁵⁾。当院では2018年以降は出血の状況が落ち着いているRPOC症例に対しては、駆瘀血剤(桂枝茯苓丸)の投与下での待機療法を治療方針の一つとしている⁶⁾。

今回は妊娠初期の流産後に発生したRPOC症例に対して駆瘀血剤を処方した6例について、その処方経験を報告する。

症例

当院では2018年から出血の状況が落ち着いていれば、侵襲的処置は行わずRPOCに対し駆瘀血剤としてクラシエ桂枝茯苓丸料エキス細粒(2g/包)を食前に一日3包処方しつつ外来で経過観察を行っている。なお、患者には待機中の大出血や感染があれば待機不能で侵襲処置が必要に

なる可能性があるとして説明してから処方を開始している。2018年から2022年までに初期流産(中絶を含む)後にRPOCと診断し当院の管理下で桂枝茯苓丸を処方した全6例について、臨床背景やRPOCの最大径、流産から処方開始までの日数、処方期間、処方開始からRPOC消失までの期間、副作用の有無などを調査した。

対象となった症例の内訳と処方期間など調査結果のまとめを表に示し、RPOC診断時の経膈超音波画像も1例であるが参考として図に示した。全例単胎で年齢の中央値は33[範囲:28-36]歳で経産婦と中絶例が4/6例(67%)であった。IVFでの妊娠例や合併症を有する症例は認めなかった。全例とも流産時に流産手術(子宮内容除去術)が行われており、5/6例(83%)が他院での手術例であった。

流産手術時の妊娠週数の中央値は妊娠7.5[範囲:6-11]週で、RPOCの最大径は2.3[1.0-3.4]cmであった。流産から処方開始までの日数は74[10-135]日であり、処方開始から終了までの処方期間は47[13-84]日であった。

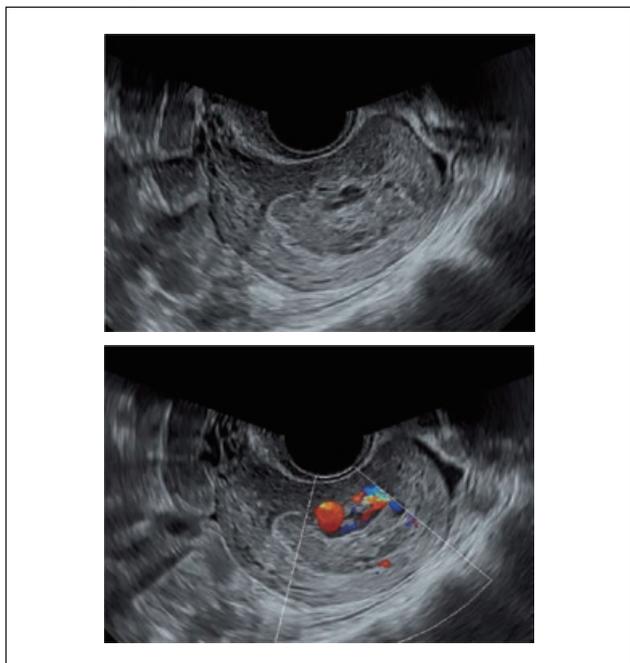
表 対象症例の背景、治療経過(n=6)

年齢(歳)	33 [28-36]
BMI	18.5 [16.4-23.7]
経産婦数(n)	4
中絶例数(n)	4
流産時の妊娠週数	7.5 [6-11]
RPOC最大径(cm)	2.3 [1.0-3.4]
流産から処方開始までの日数	74 [10-135]
処方期間の日数	47 [13-84]
処方開始からRPOC消失確認までの日数	53 [22-100]

症例数(n)以外が中央値[範囲]

RPOCの消失確認までは処方開始から53[22-100]日であり、その間に投薬による副作用で投与終了になった症例は認めず、大出血、感染などによって入院管理や侵襲的処置を施行した症例も認めなかった。

図 RPOC症例の経腔超音波画像
(下は同一症例のカラードップラー画像)



考 察

今回の検討では中絶例が過半数であった。妊娠初期の流産後(中絶を含む)にはRPOCが発生する危険性を患者本人に伝えることがまず肝要であり、出血が続く場合などは慎重なフォローを行い早期にRPOCを診断し、管理は周産期センターなど出血や感染に対応できる施設ですべきである。また妊婦が妊娠初期に児を喪失するという精神的な負担は大きいのが、流産後に侵襲的な手術が加わる場合があるということを丁寧に説明し理解していただいている必要があると考えている。

今回の検討では桂枝茯苓丸を処方することで、RPOC消失までの期間を短縮するとは判断できなかったが、最近では概ね2~3カ月の経過観察や処方が必要となることを説明して処方を開始している。

妊娠初期の流産後に発生するRPOCに対する最適な駆瘀血剤の種類や処方期間、通院フォローの間隔などは検討課題として残るが、副作用も少ないため待機期間に、その処方に加えておくことは大出血や感染の予防にも繋がる可能性がある。症例の蓄積を行うことで投薬効果について明確にすることが必要であると考えており、今後もRPOC症例の診療を行う場合は処方を行っていく予定である。

【参考文献】

- 1) Foreste V, et al: Hysteroscopy and retained products of conception: an update. *Gynecol Minim Invasive Ther* 10: 203-209, 2021
- 2) 中西美紗緒 ほか: RPOC (retained products of conception). *産と婦* 90: 145-148, 2023
- 3) 小川正樹 ほか: Retained products of conceptionの取り扱い. *周産期医学* 51: 377-378, 2021
- 4) 服部瑞貴 ほか: 当院におけるretained products of conception (RPOC)に対する治療法の検討. *産婦の進歩* 73: 169-176, 2021
- 5) 徳毛敬三 ほか: 胎盤遺残に駆瘀血剤を使用した5例. *産婦漢方研のあゆみ* 35: 154-160, 2018
- 6) 藤田浩平 ほか: 当院におけるRPOCに対する駆瘀血剤投与症例の検討. *産婦漢方研のあゆみ* 39: 35-38, 2023